

## 企画展紹介

### 企画展「江戸時代の天文学」(その2)

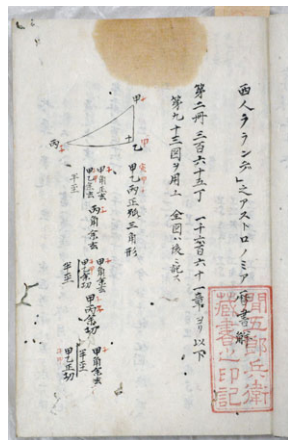
1月20日(火)から、3月1日(日)まで、「江戸時代の天文学」と題した企画展を好評開催中です。展示場4階の常設展示「江戸時代の天文学コーナー」付近を会場として、約35点の関連資料を展示しています。

今回の企画展の特徴は、江戸期の天文学を伝える名品をたくさん所蔵している大阪歴史博物館と大阪市立中央図書館から、選りすぐりの資料をお借りして展示していることです。ここでは、それらの中から注目の資料を紹介します。

#### ■幕府天文方のオランダ書翻訳の足跡を一覧に

19世紀の幕府天文方は、オランダ語の書物の翻訳を通じて、西洋天文学の知識を積極的に吸収しました。その中心はフランス人天文学者ラランドが著した『天文学』というオランダ語の本で、スタッフが総力を挙げて40年間にわたって翻訳、研究しました。その口火をきったのが1803年に『天文学』を入手した幕府天文方・高橋至時で、半年余りの間に『西洋人ラランデ暦書管見』という研究ノートをはじめ、何と二千ページに及ぶ研究書を著します。しかし高橋はその時の無理が原因で亡くなってしまいました。その後、高橋と同門であった間重富をはじめとした第一線の天文学者たちが翻訳を継続し、その成果として日本で最後の太陰太陽暦である天保暦が作られ、1844年に施行されたのです。

企画展では、大阪歴史博物館が所蔵する高橋至時の『西洋人ラランデ暦書管見』、間重富の『星学』という貴重本が登場します。あわせてラランドのフランス語



(左)写真1:ラランド『天文学』フランス語原書(大阪市立科学館所蔵)

(右)写真2:高橋至時『西洋人ラランデ暦書管見』(大阪歴史博物館所蔵)

版、オランダ語版も展示します。これらが一堂に見られる機会はめったになく、筆者の一押しです。

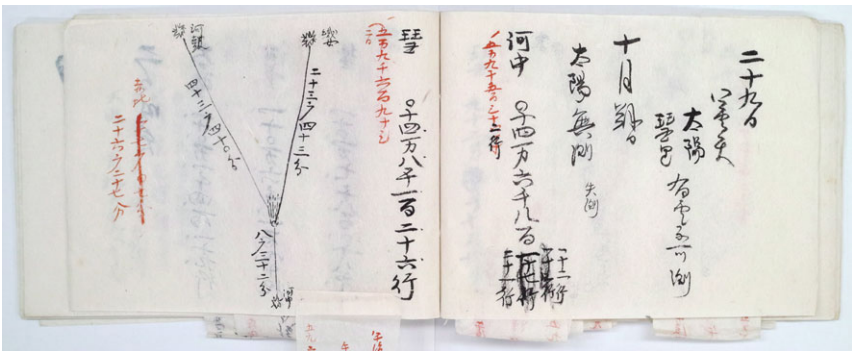
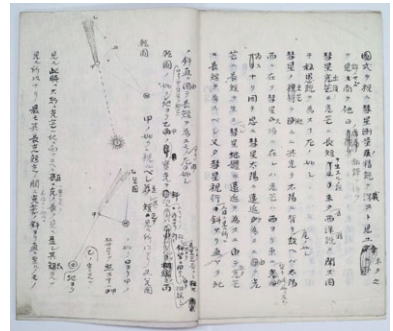
## ■江戸期の彗星研究最前線

夜空に尾を引いて輝く彗星は、江戸時代初期の人々にとっては全く正体不明の天体で、突如出現する変わった形の光を見て、不吉なことが起こる前触れであると考えていました。

江戸後期の19世紀に入ると蘭学の影響により、彗星は太陽系天体の一種であり、太陽の周りを回る軌道をめぐっていることも知られるようになりました。加えて、研究者たちは、天球上を日々動いていく彗星の位置を詳しく観測するようになりました。

企画展では、大阪市立中央図書館が所蔵する、黎明期の彗星研究に関する資料も展示します。まず『彗星概説』という小論は、間重富が最新情報も交えて彗星とはどのような天体なのかを解説した未完の稿本です。

また、『彗星測数三測』は、間重富の長男の間重新が1804年に出現した彗星を観測した際にその場で書き留めたフィールドノートです。通常、現在まで伝わっている記録のほとんどは清書された観測記録で、このような生データを記録した資料はほとんど現存していません。この機会に、ぜひ当時の研究者の息吹を感じていただければ幸いです。 嘉数 次人(科学館学芸員)



(右上)写真3:間重富『彗星概説』

(上)写真4:間重新『彗星測数三測』 (いずれも大阪市立中央図書館所蔵)

企画展「江戸時代の天文学」展示場4階にて開催中です。(3月1日(日)まで)